

Ⅱ―8 アジアの近代化と日本

(議長 芳賀 徹)

サウイトリ・ウイシユワナタン

発表者 サウイトリ・ウィシュワナタン

私は、自分のペーパーを読み始める前に一言お礼を言わなければならぬと思います。国際日本文化研究センターに私が呼ばれるのは二回目で、非常に光栄に思っております。そして、その上今度は石田先生も参加されて、私のセッションにコメントーターになっていらっしゃるということは、嬉しいことでもあり、実はまたドキドキもしています。やっぱり先生を先生としていつも見てまして、ですから厳しいコメントもあるのではないかと。そして、先生のご希望に沿ったペーパーを書いたかどうかとすぐドキドキしています。

それからまた、いろいろな外国からの先生、私が訪れることができる国の方までがいらっしやって、その方々と日本研究だけではなく、その国々の文化についても議論できるような機会を与えられたことも大変ありがたく思っています。また、最後のお礼と言ったらおかしいかも思いませんけれども、もうひとつは、石田先生のところで勉強した方は、インドの考え方から見れば私にとって兄弟になりますから、マッキーン先生とここでお会いできるようになってすごく嬉しかったんです。それも国際日本文化研究センターのおかげですから、それにもお礼を言わなければなりません。

それではペーパーに入りますが、このテーマは次のような観点から論じることができると思います。ひとつはアジアの近代化と日本の役割、もうひとつはアジアの諸国が日本の近代化過

程をモデルとして選択することができるかどうかということ。

しかし、そのどちらの見方をとるにしても、ふたつの概念に基づいて私なりの定義をしておかなければならないと思います。ひとつは、アジアというのは何を指すかということ。もうひとつが近代化の概念です。

ただ、この問題に触れる前に、「アジアの近代化と日本」というテーマについて感じたことをまず言わせていただきたいと思えます。同じような言い方に「世界と日本」というものもあります。この場合は、私の感じでは、まず日本があり、そして世界も別に存在しているというようなニュアンスがありますし、また「アジアの近代化と日本」と言う場合も、日本はアジアに属さないのか、あるいはアジアの諸国と違った特殊な国なのかという疑問が出てまいります。ですから、私はそのような前提に立つてものを考えることに大きな不安を感じます。そのことを最初に申しあげたいんです。

もっともこう申しあげたからと言って、日本が十九世紀に非西洋国として初めて積極的に近代化の道を歩んだ国だということとを否定するつもりではありません。日本が非西洋国としてだけではなくアジアの一国としても、近代化を通して自国の独立と振興を図った国として私は誇りを感じます。本当は私の日本の研究のひとつの動機はこれなんですけれども、このように自国の独立を守った国のことを勉強しなければならないと思ったからです。

日本のことを考える時、単なる「他者」論に持ち込むのを避けるべきだと思いますし、地理的にも文化的にも同じ圏にある国として検討したいと思います。アジアの諸国はそれぞれ特色を持っていますし、日本にもそれがあります。しかし、日本が近代化に成功したところからいろいろな意味で日本をひとつのカテゴリに入れ、それに対してほかのアジア諸国を別のカテゴリにまとめ入れてしまうことは、合理的ではないと思います。だから、議論をアジア対日本という方向に持つていくことにも不安を感じないわけにはいきません。

ご存じのように、十九世紀にR. キップリングは、「東は東、西は西、その二つはいつになっても平行をたどるだろう」(East is east, west is west and ne'er the twain shall meet.)と言いました。しかし、二十世紀が終止符を打とうとしている今日、「世界は世界、日本は日本、その二つは合流することがないだろう」ということが次第に言われるようになってきました。このように日本を孤立させる議論は先進国でも発展途上国でも唱えられるようになりましたし、それに似たようなことが日本国内の「日本人論」にも現れていると考えてもよいのではないかと思えます。

誇張した発言だと思われるかもしれませんが、要するに最近になって日本とは対話が生まれにくいということが意識されるようになったのです。そして、そのことについては日本のほうに重い責任があるということです。日本は、ほかの文化を理解

するという面ではかつてと同じく鈍感で、そのため摩擦が避けられなくなっているということでしょう。このようなことは私は大変不安を感じているわけです。と言うのは、ある国の特定の文化的要素ばかりを重視し、そのことによって他国との相違を強調すれば、そこからは対話が生まれにくい状況が出てくるからです。

ここで、先にあげた定義の問題にもどりましょう。本日テーマについて日本以外のアジア諸国を考えた場合、中国とインドのような面積の上で大きい国もあれば、東南アジアのような諸国や南アジアのほかの諸国もあります。それらの諸国は、歴史的な背景を異にし、また近代化の過程やイデオロギーの面でもひとまとめににくいし、日本との関係もまちまちであります。だから、まず初めにインドの問題に話をして、その後アジア諸地域の問題を日本との関連で考えてみたいと思います。

近代化という問題の意味のある議論にするためにも、またインドと日本との関係を考えるためにも、近代化における意識的変革をもたらす上で不可欠だった科学技術の導入というテーマに話を進めたいと思います。大きっぱに申しあげると、一般に日本の場合はこの方面の要因が豊富だったのに対し、インドの場合は大変不足していたと言われています。また、言うまでもなく近代化の過程になくならないのは変革に対する積極的な態度であり、これも日本の場合には十分にありましたが、それに対してインドの場合は変革に対する抵抗があったと言わ

れています。そのため、このような近代化の障害はもともとインドの文化に根ざしているのではないとも言われてきました。インドの文化が永遠不変のもので、大げさに言うところ、そこに近代化はあり得ないということになってしまふのです。

ここで、フォスコ・マライニ先生の説を引用させていただきます。

「技術革新は近代化の核心であります。それがたまたま西洋に生まれたというだけで、近代化と西洋化を同一視することはできません。この技術革新が別の文化に出会う時、それを巧みに利用して国の発展を図るような文化を持つ国もあれば、それができない国も存在するわけです。日本が前者のよい例であるとするれば、インドは後者の一国であります。」

マライニ先生は、日本の伝統、特に神道、儒教および仏教が近代化を実現する上で有利な条件を具えていたと、次のように説明しています。それから、マライニ先生は、別々に神道、仏教、儒教のことも言いましたが、最初は神道のことについて考えてみます。簡単に言いますが、もっと詳しい説明もいろいろできるかもしれません。

・ 神道には、科学と技術を取り入れることに障害になるような教義（ドグマ）が存在しなかった。

・ 神道は理論に基づく宗教ではなく、直観または情緒主義に基づく。

・ 神道はこの世を認める宗教で、世を捨てることを理想化する宗教ではない。

る宗教ではない。

・ 日本の神話によると、世界が神から生まれたという説がある。神が創造したとは言われない。だから、人間、神、自然からなる宇宙全体が統一された形で受け取られている。

・ 神道の精神的活力（バイタリティ）は日本の原動力になる。神道は集団の宗教で、祭り、踊り、歌などが神道ではなくはならない部分である。庶民は光輝を好むが、洪き、侘び、寂びなどは一部の上流人士が持つ価値観である。

・ 日本には「オリジナル・シン」という観念はない。

・ 儒教の影響によって個人よりも集団のほうが優先される。社会の人間関係に対して敏感になる。権利より義務が主張される。教育に対して積極的態度をとるようになる。

・ 仏教の影響によってこの世が非恒久性であると考えられている。そのため事態は常に悪化する可能性をはらむという認識があり、そこから忍耐強い性格と、どんなに事態が悪化しても立ち上がるような精神がつくりあげられる。

だから、神道、仏教、また儒教によって日本人の価値観ができてきて、それが近代化に役立っているということの説明に使うんです。要するに日本は、近代化を非常に有利な伝統と思想の背景の中で実現することができたということです。神道は日本人に精神的活力と現実主義的な態度を与えた。儒教は知識に対する尊重と道徳の世俗化をもたらし、これによって社会的安定が維持されるようになった。そして、仏教の思想は国がある

危機に瀕している時大きな力になったのです。

これに対してインドの場合は、マライニ先生によると二つの障害があったと言います。ひとつはカーストの制度。もうひとつが牛の崇拜です。また、インドの哲学から生まれる思想も近代化を妨げる要因になりました。と言うのも、富を獲得するところが軽蔑され、人間のエネルギーをあの世のほうへ向くようにしたからです。要するに、日本人はこの世に重点を置き、生活の向上のためにたたかい、現実的な立場で問題を解決しようとしてきたのに対して、インドは優れた思想を持っているにもかかわらず、それは必ずしも現実の問題を解決する力として働かなかったと言うのです。

このところは、前のセッションにも出てきたようにインドには一つの文化しかないかと言うと、例えば回教、モスリム教、キリスト教、仏教なども同じく存在している。そういうことを別にして、私の話は大体ヒンドゥー教に関連しているものですが、けれども、お許しください。

カースト制度や牛の崇拜は確かにインドにあるし、私もそれを否定するつもりではありません。しかし、カースト制度が決して肯定されているものではなく、この制度があるにもかかわらず、近代化また工業化を通して多様な職業の選択が自由に行われていますし、またそこにいろいろな変化も見られます。しかし、カースト制度やその変化について話すことはテーマからはずれることになるので、ここでは割愛いたします。

さて、マライニ先生が日本の近代化にふさわしいとして取り上げた伝統的な条件は、果たしてインドに存在しないものでしょうか。また、インドの哲学は、果たしてこの世を否定し、富を獲得することを禁止しているのかどうか。その問題について考えてみたいと思います。

第一に、インドの伝統と哲学はドグマを主張するものではないし、真実の追求にいろいろな道のあることを認めています。議論なしに同感を求めるというよりも、疑問を提出して真実を追求する伝統があるのです。日本でも、インド人があまりにも議論好きで何でも議論していると、言われています。インドにはいろいろな国の文化や思想が自由に導入され、それがインド文明の向上に役立ったのではないのでしょうか。インドにおいても新しい観念を受容しやすい文化が存在していたわけですね。

第二に、インドの哲学また宗教は日本の神道と違って理論を基本にするものでしたが、このような学問的活動あるいは知的遊戯は、ある限られた一部の上流人士の議論にとどまっただけで、全体の状況を示すものではありません。と言うのも、一般の庶民の信条、態度は、頭脳によるよりも心による経験に基づいているからです。インド人も日本人同様にお祭り好きで、踊り、歌、芝居などが盛んですし、神道が与える精神的活力に負けないものがインドにも存在します。

第三に、富の獲得ということがインドにはなかったという点についてですが、もしもインド人が古代から豊富な天然資源以

外にも富を蓄積し、そのことによって生活を豊かにしなかったとしたら、外国人が何度もインドを侵略することはなかったのではないだろうか。南インドのタミル語のことわざにあるように、「海を渡って外国へ出て富を獲得しなさい」と言われてきたのです。職業の区分に基づくカースト制度の問題にもかかわるのですが、商人の義務（ダルマ）は商売と金儲けにあったのです。

教育を重要視し、学問を尊重することも、またインドに存在しないわけではありません。前近代のある社会階層では高等教育まで義務づけられたほどののですが、そのほかの階層でも学校制度がなかったとは言えません。私が子どもの時に学んだ修身に関する教科書には、古いタミル語の短詩で「言葉を教えてくれた人は神の地位にある」とあり、それを暗記したことを今でも覚えています。村々にあったインドの伝統的な教育制度は植民地になってからつぶされてしまったのです。この問題についてはあまり触れませんが、古代インドのことを言ってますから、ちょっとそれを言いたかったわけです。

社会におけるそれぞれの地位に合うような義務がインドでも果たされていたわけです。社会における微妙な人間関係も重要視されました。次に、この世を非恒久的なものだとする認識の問題ですが、こういう考え方はヒンドゥー教にもあります。どのようなことがあっても精神的に乱れない、どんな破滅的な状態の中でも立ち上がるというような例がたくさんあるのです。

現代インドにおいて日本のような集団主義が見られないというのは確かですが、しかしだからと言ってインドの文化的背景やインド人の社会的活動の分野においても個人が重視されていたかと言うと、それには疑問があります。こういう問題には一部の現象をもって一般化するというような危険があるのでないかと思えます。と言うのも、インドの場合、個人主義があまりにも誇張され、誤解を招くことが少なくなかったからであります。

以上のように、日本の文化や宗教に見出された様相は、その全部ではないにしてもインドにおいても見られることがあるのです。しかし、不思議なことに、この世は非恒久的だという理解があったから日本人は精神的に強くなったと言われるのに対し、インド人の場合は、そのためにかえってこの世にあまり興味を示さなくなり、その結果独立自存の経済発展を実現することがなかったと言われます。つまり、日本の文化の長所だと思われるものがインドの場合は短所だと考えられたのであります。同じ現象に基づいて、一方では日本の成功の原因が議論され、他方ではインドの失敗の原因が議論されてきたと言っているでしょう。同一の現象が日本とインドとでは正反対の結果をもたらしたということになるわけです。

マライニ先生によると、日本のエリート層には羨み、寂しき、侘びなどに対する感覚があるが庶民には認められないと主張する一方で、インドの場合は、その一部の層の価値観をもって全

インドにあてはまるような大きっぱな議論を展開しています。インドにおいても、エリートの中で理想とされてきたことが必ずしも現実に行われていたとは限らないのです。

近代化の問題、特に科学技術の受容の問題について言うと、科学技術を吸収する度合いの高い国とそうでない国を区別して近代化の成果を説明することに危険があると思います。なぜなら、文化の面があまりにも誇張され、近代化を進める上で必要なほかの要素が軽視される結果になるからです。そのために二国の間に対話が生まれにくくなる可能性があります。また、先進国と途上国間の距離が埋められなくなり、近代化を達成する希望まで消えてしまうでしょう。なぜなら、しばしば近代化の障害になると言われている文化の諸要素は、強制的に消滅させることなどとてもできないからであります。ですから、障害だと思われているインドの場合も、ほかの国の場合も、そういう障害が考えの上ですぐ消滅できないということですね。

日本の経験から学ぶとすれば、日本人がたとえ一時的に伝統を否定したり軽蔑したりする時期があったとしても、彼らが日本のなものをどのように巧みに利用したかという点ではないでしょう。技術革新があらゆる分野に浸透し、そのことで利益が得られるようになった時、近代化に対する抵抗もだんだん崩れていったわけです。

次に、日本とアジアのその他の国の近代化ということを少し考えてみたいのです。

日本とアジアの他国、特にインドを近代化という面から比較すると、日本の長所は相対的に小さい国であったということ、近代化のために国民の総意やエネルギーを動員しやすい統一しやすい国であったということではないでしょうか。だから、そこも日本では問題がなかったとは言ってもせんけれども、たくさん問題があったけれども、相対的な問題でインドと日本を比較すると、ナショナル・コンセンサスを得ることはもつと簡単だったのではないかと思います。その点では、アジアの中で日本は例外なのです。ほかのアジアの国では、現在も民族、宗教、言語などの面で多様性が見られるし、近代化の過程で科学技術を導入して応用したにもかかわらず、対立が深刻化するだけだったのです。

このような複雑な現象を、日本は同情をもって理解しなければならぬと思います。アジアの国々はそれぞれ自国にふさわしい道を模索しているし、経済大国になっている日本は、アジアの一国としてこれらの国々の体験を評価しなければならぬと思います。今のところ日本の態度は、アジアの一国というよりも、先進国のクラブの一員として先進国との関係を第一に考えているように見えます。そのことで西洋の諸国はアジア諸国に対して偏見をいだくようになるし、アジアの諸国が日本の発展のために果たした貢献も軽視するようになるわけです。

私は、日本が近代化したと言っても、アジアの貢献もたくさんあったと思います。私たちの失敗は、ある意味で日本の成功

にもなったんではないかと思えます。ほかにいろいろ理由もありますが、特に戦後になってから、日本が自分でしなかったいろいろなことによっても日本の近代化あるいは発展に役立ったから、それも忘れてはならないと思えます。

日本がアジアの諸国の近代化に必要な協力を拒否しているとは私も思っておりません。その一々に具体的に触れることはここではいたしません。しかし、ひとつ感じられるのは、経済協力が相互関係に基づくと言うよりも、日本のほうからの一方的な思みの関係のように見られるということです。戦後の賠償交渉は、日本とアジア諸国との関係において経済面では日本を有利にしました。けれども、それをもって相互理解の新しい道は開かれたとは言えないでしょう。

戦後の日本は経済発展だけに重点を置いたことで評価されませんが、アジアの諸国との関係も経済の尺度だけではかられるようになりました。そして、そのことにはもちろんアジアの諸国も責任を負わなければなりません。と言うのは、アジアの諸国も日本を見る時、経済大国あるいは経済の面だけ主張していたんではないかと思えます。経済面だけ見ると、日本とアジア諸国の格差が大きくなり、そのことで日本とアジア諸国間の関係が互いに引き離されるようになったのではないかと思えます。

今日経済問題をめぐる摩擦が起こるたびに、「心のふれあい」ということが云々されますが、しかしそれ以前にまず相手の立

場を理解することが必要だということは認識されていません。文化の差を取り出してきて、相手の立場に同情していないというものを隠そうとするのです。この現象は、日本と先進国の間の関係にも見られます。摩擦が大きくなればなるほど文化が違うからといって、違いを取り出して、あとで具体的な問題解決に入れなくなることもあります。ですから、文化の相互理解によって問題解決の道が開かれるというよりも、それ自身が障害になることもあるのです。なぜなら、それぞれの文化の相違を説明することによって、かえって両者の合意が難しくなることがあるからです。

ところで、日本の土着文化をもたらした神道は、集団の宗教とみなされています。共同体の宗教として、個人よりも集団を重視するようになったというわけですが、これなども日本の社会が近代化する上で有利な条件であったと思われれます。そして、もしもそうであるならば、日本人の精神はいつものびのびして、日本という国境を超え、「世界」という巨大な集団を「日本」という個人に優先させるために一番ふさわしい文化の根を持っていくはずなんです。

日本には、共同体のレベルから国家のレベルまで忠誠心を集団に寄せるといふ傾向がありました。とするならば、その同じ忠誠心を世界に置くこともできるはずなんです。もちろん国のレベルのことと言っても、忠誠心を向けるためには不変の象徴を確立する必要があります。しかし、世界というさまざまな文

化や民族によってできあがっている集団を対象にするとすると、そう簡単には行きません。世界そのものの統一性を現わす象徴も見つからないでしょう。

もちろんこれは前のセクションにも出ましたが、それをどのように具体化するかということもあるし、また「世界対何」といった問題の立て方も問われることになります。ですから、「世界の中の日本」と言うとき、そこに何か曖昧なものが感じられるでしょう。さして挑戦的な意味があるとも感じられないかもしれません。つまり、それはチャレンジになっていないかもしれません。

このようなことは日本だけの問題でしょうか。そうでもないかもしれません。日本の文化は、あくまでも日本という領土の中で育まれてきたものであり、「他国の文化を日本化することに成功したことはなかったはずです」と言ったけれども、断言できるかどうか、それもいろいろ問題が出てくるんじゃないか

コメント 石田 雄

私は、この主題を見た時に、これは大変厄介な主題だ、主題自体をまず議論しなきゃいけないと思ったのですが、そういう意味でウィッシュワタンさんに大変同情いたしました。それでそこからウィッシュワタンさんがこの主題について疑問を持たれたということに全く同感であります。

と申しますのは、ちょうど今から五年前に西ベルリンで国際会議が

と思います。

日本が成功したのは、科学技術を受容し吸収することによるものだったのです。しかし、その成功のかげで、日本は神道の影響下にあった直観主義または情緒主義を見失ったように見えます。その結果、心と心の結びつきの問題が無視され、特にアジア諸国との関係においてそういう事態が生じたと言えるでしょう。

現在のアジアの諸国は、近代化の道を歩む過程で、「物」の支援と同時に日本からの同情ある心のふれあいを期待しているのです。その期待に対して、いろいろな挑戦を克服してきた日本はどのように応えるでしょうか。

日文研は、学者の交流または研究活動によって諸国との相互理解を深めていこうと努力しています。そのことによって日本とほかの国との、心と心のふれあいがさらに深まるように期待しております。

ありまして、その主題が「二十一世紀はアジアの世紀か」という題でした。そして、その冒頭に私に話をしろというふうに頼まれました、その主題自体に反対するけれどもいいかと言って議論をしたことがあります。その問題自体をここで議論するつもりはありません。そのペーパーはありますから、ご希望の方には差し上げますが、とにかくここでまず問題にしたいのはアジアという問題です。

その時の報告でも最初に断らなければならなかったのは、「アジア」

という表現が地理的な範囲以上の意味を持ち得ないということであり
ます。なぜかと言うと、まずその地域には現在十五世紀の初めだと
考えるイスラム暦を採用している人たちもおりますし、またタイの仏
教徒のように今は仏教暦で二十六世紀の半ばだと考えている人もい
るからであります。

次に、近代化という問題はもつと厄介な問題で、約三十年にわたっ
てこうした考え方について問題があるということは繰り返し論じられ
てきましたので、私としては実はなるべくこの言葉は使わないように
しているわけです。まして「近代化」という言葉を個人当たり国民
所得というような数字にしやすい指標を使って考えて、そしてそれを
文化的特質と関係づけるということになりますと、その国が直面して
いた国際情勢の違いとか、あるいは地政学的な位置の違いとか、その
ほかいろいろの要素をみんな無視してしまつて不当な単純化になると
いう意味で、方法論的に大変な問題が起つてくると思います。

例えば古い例ですけれども、ノーマン・ジェーコブス (Norman
Jacobs) が『近代資本主義の起源と東アジア』という一九五八年の本
の中で書きましたようなやり方、つまりマックス・ウェーバーの「近
代資本主義の精神」というのは日本にあつて中国にはなかつたとい
うことから両国の経済発展の違いを説明しようというようなやり方は、
実はマックス・ウェーバーの方法から見ても明らかに逸脱した文化的
決定論と言わざるを得ないと思います。

また、「近代化」論を主張する人の間にあらがちなもう一つの欠陥
は、伝統と近代というものがちょうどゼロ・サム的な関係にあるとい
うふうに考えがちな点であります。ルドルフ夫妻 (Lloyd and Susanne
Rudolph) が『伝統の近代性』という、まさにそういう題をつけて
一九六七年に公刊した本は、実はインドの伝統が近代化に役立ってい
るのだということを、これはカーストまで含めて言っているわけです。
詳しくはウィッシュワナタンさんのほうがご存じですから私は申しませ

んけれども、とにかくそのように文化的な特徴と近代化を結びつける、
あるいは近代化というものを伝統と近代がゼロ・サム的な関係にある
ものだと言うことについては、大変な危険性があると思います。

私自身は思想史を専門とする一人として文化的伝統の意味を重視す
るということについては大いに賛成なのですけれども、その文化的伝
統を固定的にとらえて、それを近代化を進める決定的な要因として一
義的にとらえようという考え方には、私は賛成できません。なぜなら
ば、そのようなとらえ方は、第二次大戦中に日本で見られた非常にエ
スノセントリックな国民性論のようなイデオロギー的な欠陥を示すか、
あるいは第二次大戦後にアメリカ社会学の中で見られましたようなナ
ショナル・キャラクター論というものの持つていた方法的な欠陥を繰
り返すことになるからだと思います。

そこで、私は勝手にこの与えられた主題を読みかえまして、このセッ
ションで「近代における日本とその他のアジア諸地域」というふう
にこの題を読みかえたらどうかというふうに思ったわけです。しかし、
このように読みかえらしても、日本とアジアのその他の諸地域を比
較しようと思つてみると、そもそもさっき言いましたように「アジア」
という同質の単位があるわけではないので、それぞれの地域の特質
と日本とを個別的に比較することにならなければならぬわけ
ですし、また、一体何を基準にして比較するかということによつて、
いろいろな議論のしかたがあるということでも、とても短い時間にはで
きません。

そこで、私は多少乱暴であることを承知の上で、日本と他のアジア
諸地域との間に近代に見られた相互イメージ、つまりお互いにならぬ
の姿を見たかということの問題にするという観点から、多少見てみた
いと思つてみます。そうだとしますと、実はアジア諸地域の個別の特殊性
にもかかわらずある種の共通性があったということ（これも一面的に
しかとらえられないことですが）何かそういうことが言えるの

ではないか。比較をする場合にも、そのことを前提にして比較すればそれなりの意味があるのではないかという意味で、多少の歴史的な事例を申しあげていきたいと思うわけです。

と申しますのは、一番顕著な例は、日露戦争における日本の勝利がアジア諸地域、あるいはもっと広く非西欧諸地域でどのように受け取られたかという点にかなりな共通性があるからであります。この点については、インドのネルー、ガンジー、それからインドネシアのスカルノ、それぞれ回顧して書いておりますし、中国の孫文もまたスエズ運河を通った時に、アラブ人が日本の勝利に勇気づけられたという話をしていたということを述べております。また、明治時代の日本の側から見ても、アジア諸地域で等しく西欧帝国主義の衝撃に対して独立を維持しようと努力している姿を見まして、多くの日本人がちょうどその人たちが明治維新の当時に日本が持っていたのと同じような、西欧とのかかわりの中で課題を持っているのだというふうに感じた、そしてそれなりの共感を持ったということもかなり広く見られる現象であったと思います。

こうして日露戦争後、アジアの諸地域から日本に来て明治維新後の日本に学ぼうとする留学生の数も増えてまいります。一時は清国から、例えば一九〇六年には一人に達するほどの留学生が来ていたと言いますし、大体同じころ、一九〇七年か八年ごろにはベトナムから約二百人の留学生が来ていたというふうに言われております。その結果、一九〇七年の亜州和親会のように、中国の革命家を中心にしてインドのほかアジア諸国の革命家の連帯を日本でつくろうと（もちろん日本人も若干加わっておりますが）そういう企てもあったということが承知の通りであります。

ところが、日本政府の側の態度はそういう人たちには必ずしも同情的ではなかったわけで、清国であるとかフランスであるとかイギリス政府の要請を受けて、こうした人たちをむしろ追い出すという措置を

とったわけですから。ご承知の通り、一九〇五年にはいわゆる清国留学生取締規則というのがありましたし、一九〇九年にはベトナムの留学生全員に国外退去を命ずるといふようなことがありまして、その結果、中国人の陳天華、あるいはベトナム人留学生のチャン・ドンフー（陳東風）がそれぞれ自殺をするというような悲劇的なこともありました。そして中国留学生は大量に帰国するということになりました。もちろん一九一五年にインドから亡命したビハリ・ボースが、後に中村屋をつくりましたご承知の相馬愛蔵によってかくまわれたというのも有名な事実でありますけれども、しかし彼の場合はむしろ例外的な幸運であつたというふうに言わざるを得ないと思います。

日本から欧米帝国主義に対する独立の先例を学ぼうとしたアジアの諸地域からの留学生たち、活動家たちの日本政府に対する失望は、第一次大戦後の日本政府のアジア諸地域に対する態度によって一層大きくなりました。それは、例えば大隈内閣が一方では「東西文明融合論」、東西文明は日本において融合されていくのだという議論を主張しながら、実際には西欧列強に伍して日本帝国主義をアジアに拡大する、つまりアジアに利権を拡大しようという政策をとりましたから、例えば一九一五年の二十一ヶ条の中国に対する要求というふうなもので、のちに中国の五四運動のような反日ナショナリズムを刺激するということにもなったわけでありまして。

インドの詩人ラビンドラナト・タゴールは、一九一六年に日本を訪れているわけですが、その時日本が西欧列強の帝国主義的国家主義の道を進むことがないようにという警告を發しております。ところが、この警告は多くの日本人によって聞き入れられることはなかったわけでありまして。そして、一九三七年から日本が本格的に中国侵略に乗り出しますと、タゴールはこれに抗議をして、それまで親しくつき合っていた日本人の詩人、よくヨネ・野口と言われて知られている詩人ですが、この野口米次郎と絶交いたします。野口は、タゴールは同じア

ジアの詩人であるから日本の立場はわかってくれるはずだというふう
に繰り返しているのですけれども、タゴールは、日本が中国に対
する侵略をしている限りアジアにおける人間性の維持というのはいけ
ないということ、あくまで野口および日本政府を批判いたします。

同じような対立は、日本からの脅威をより直接的に受けました中国
の場合にはさらにはつきりしております。日本に留学した李大釗は、
一九一九年に「大亜細亜主義と新亜細亜主義」という論文を書きまし
て、大アジア主義というのは日本の覇権のもとにアジア諸国を従属さ
せようというものであって、それでは困るので、新アジア主義とい
うのはアジア諸国間の平等な連合でなければならないという主張をい
たします。また、一九二四年孫文は、有名な神戸での演説で、日本は
西方の帝国主義的な侵略の道を選ぶか、それとも東方の王道のとりで
となるか、つまり西欧の帝国主義に反対するとりでとなるかという、
その選択に迫られているのだというふうに申しました。ところがこの
演説は日本では、孫文が日本の大アジア主義を支持した演説であるか
のように戦争中にはしばしば解釈されるということになりました。

とにかくこのようにして太平洋戦争（当時の日本での表現によれば
アジアを欧米帝国主義から解放するための「大東亜戦争」）に入った
後に、ガンジーは、一九四二年の『ハリジャン』という機関紙に書い
た「すべての日本人へ」と題する論文で、インド人がイギリスの植民
地主義に反対しているからと言って、決して日本の戦争を歓迎してい
るのではない、そういう誤解を持たたら大変な間違いであるという警
告をいたしております。つまり、インド人が主張しているのはイギリ
ス帝国主義への反対であるけれども、その同じ反対は、ナチス・ドイ
ツの侵略主義であろうと日本の軍国主義であろうと、そのいずれに対
しても反対するものであるというふうに申しております。

さて、第二次大戦で日本が敗北したことによって日本のアジア諸地
域に対する軍事占領は終わったわけです。そしてアジア諸地域には新

しい独立国がたくさん生まれてまいります。しかし、一九五〇年代後
半から日本が賠償というものを（これはウィッシュワタンさんも触れ
ておられますけれども）始めます。そして、ほかならぬ第二次大戦中
に日本軍が与えた損害を償うというその賠償をまさに契機として、日
本のアジア諸国への経済進出が始められることになったというのは誠
に皮肉なことでもあります。こうして日本と他のアジア諸国との間の経
済的な、普通「南北関係」と言われるものが生まれるわけでもあります。
一九五七年に日本政府は「アジアの一員である」ということを三つ
の外交方針の一つに挙げましたけれども、この南北関係について、
日本の多くの人たちはやはり「発展の遅れた」国への援助なのだとい
う認識を持っていたということは否定できないと思います。そして、
企業の中には、かつての「南進」論の系譜に沿って経済的に進出して
いく対象としてこれらの地域を考えるものもあったことも、これまた
否定できないことだと思います。

他方、アジア諸国の側で言いますと、特に開発独裁に傾きがちな支
配エリートの間から見ますと、日本からの援助への期待は非常に大き
く、それにまた依存するという形も強かったわけですが、ところが民
衆の側では、日本企業による資源の収奪や環境破壊への不安と反感が
だんだんに蓄積されてまいりました。

このような両方の見方の複雑な絡み合いの中で、日本の側では特に
政府や企業の多くの人は「援助」というふうを考え、そして事実上は
経済進出を進める。そして、その「援助」はそれぞれの相手の国によっ
て歓迎されているというふうに思い込む。他方、現地の民衆の側では
日本の経済進出への反感が蓄積されるという、非常に不幸な食い違い
が実は最もあらゆる形で出てきたのが一九七四年の田中首相の東南ア
ジア訪問の場合でありまして、ご承知のように、ジャカルタでは十万
人を超えるとも言われる大規模ないわゆる「反日暴動」なるものが起
こったわけでありまして。

第二次大戦中に日本の軍事占領を経験したアジア諸地域には、(ケンペイタイ)であるとか、(ロウムシャ)であるとか、(テンノウヘイカバンザイ)というような古い日本のポキヤブラリーがなお残っており、日本の経済的な進出が脅威と感ぜられ、そしてまた日本の軍事費の増大が続いていくという事実を見て、戦争中の恐怖を思い起こすということもしばしば出てくるわけでありませう。

実は、かの悪名高い「秦緬鉄道」と当時言っておりましたが、タイとミャンマーの間の鉄道のクワイ河鉄橋、いわゆる「戦場にかける橋」のあの鉄橋のそばに戦争記念博物館というのがあるそうであります。その入口には「Forgive! But not forget!」という標語が書かれてあるということでもあります。ところが、ある西欧のジャーナリストの表現によりますと、日本とアジア諸国との関係は、日本のほうからは常に“get and forget”、いつも取って忘れてしまう。ところが、アジアのほうでは“give and forgive”、いつも与えて許すという関係であるというふうに言ったジャーナリストがおります。この表現がどれだけ正確であるかということは、ODAそのほか経済援助の実態を明らかにした上でなければ言えないわけですが、日本とアジア諸国との間の今日の非対称的現実的な関係と、それを基礎とする双方の見

芳賀 どうも大変ありがとうございました。

さすがと云っては失礼ですが、やっぱりさすがが石田先生、非常にいい点をウィッシュワナタンさんの論文の中から掘り起こして、また新しく提示してくださいました。

一般的、抽象的レベルでの比較と言うよりは、歴史のコンテキストの中で相互イメージがどう動いてきたかということ、そして、それを通して見てくると、明治の初めのころよりはむしろ戦中戦後になって日本とアジア諸国との間の隔たりが大きくなってきて、非対称の関係がより極端になってきているのではないかということでありませう。

方の食い違いについては、十分に慎重な検討が必要であるということとは間違いないと思います。

ともかく日本のアジアに対する見方とアジア諸国の日本に対する見方というものが明治の時代にはそれほど食い違いがなかったのに、今はどうしてそれほど食い違うようになったかということはかなり重要な問題で、それは私が今言いましたように、日本とアジアの諸国との間の関係が非対称的、これは軍事力の場合もあるし経済力の場合もありますけれども、そういうふうな非対称的なものになったということがかなり関係があるのではないか。それについて事態を改善するのにより大きな責任があるのは、やはり非対称な場合に力の強いほうで、その側からそれをただしていくということが必要なのではないか。もちろんお互いのイメージにはそれぞれ多様性がありまして、その中には誤解もあるのかもしれませんが、そのことも含めてとにかくそういうイメージがあつて、そのイメージがどういう現実と関係しているのかということを考えることは、日本とアジア諸国との比較をする場合の一つの手かがりとして重要な問題を投げかけてくれるのではないかというのが、私の申しあげたい点であります。

これは「世界の中の日本」というこの会議全体のテーマにも非常に深くかわつてくることでもありますけれども、皆さんから大いに議論を期待するところがあるわけでありませう。

その前にウィッシュワナタンさん、何かおっしゃいますか。

ウィッシュワナタン 別に何もありませんが、石田先生が最後におっしゃった“get and forget” “give and forgive” ということは、本当に恐縮ですが、私のほうから見ると、西欧のジャーナリストはどのような意味でおっしゃったかわかりませんが、日本側が“take and forget” と言っているんじゃないですか。だから、経済援助をするから、それで全部忘れてく

ださいとか、それでいいじゃないですかと。アジア側から見ると、もちろん今先生のご指摘にあったように、エリートの側から「give」ということは必ずあるわけですね。あるいはこういう解釈もできますけれども、「You give, we will forgive」ということもあるかもしれません（笑）。みんなそう言ってるということじゃなくて、そのような印象もアジアの諸国につけてるんじゃないですか。だから、日本側も「take and forget」と言いますね。援助あげるから、それでもって終わりじゃないですかと。そのところが私はすごく心に残ったので、もっと反省が両方とも必要だと思います。

そして、インドに限って言うと、これもまた恐縮ですが、特にインド人が議論好きとも言いましたが、「本当に世界の中でありがたがない国はインドだ」ということがよく日本人にも言われます。経済援助をしてもなかなかありがたいと思わないし、なにかそれをもたらすのも自分の権利だと思ってしまうと。ですから、その態度は本当にいけませんということは日本人によく言われたことがあります。そのところは、別にありがたいと思わないと言うよりも、先ほど私ちょっとペーパーに触れたように、お互いさまだということですね。

例えば日本がインドとかほかのアジアの諸国に援助するということはよく出ますが、なにも日本が自分を犠牲にして援助しているかと言うとそうでもない。さっきジーン・レモンドさんの論文を読んだ時、やっぱりこのようなサープラスをほかの諸国に回すことによって、また日本の口にそれが入ってくるのではないかということを西洋人も言ってますね。ですから、それはお互いの依存ということもありまして仕方がないけれども、一方的な恵みだということを日本のほうから思われると、アジアの諸国からは反感が出てくると思います。以上です。

飯田 私、非常に切ない気持ちで発言するんですが、石田先生と十年近く前に国際交流基金の派遣でアメリカの南部を一ヶ月ぐらい講演旅行をして歩いて、その時マッキーンさんにお会いしました。

私、経済学者なんですけれども、経済という問題を議論する時に非常に難しいないつも思う。芳賀さんも経済学者は大嫌いだということはおよく存じておりますが、去年のこのシンポジウムでも、日本の経済のアジアとのかかわりについて非常に批判的な意見が多かった。

私は、実は七二年から七三年まで一年間、まさに日本の技術援助の一兵隊としてインドネシア政府で働いていました。日本へ帰ってきて一年たかないうちに、石田先生のお話に出たあの反日暴動、当時の田中総理がジャカルタおよびバンコクで猛烈な反日暴動にあったというのが、ものすごい強烈な印象だったんですね。そのことについて言いますと、私はあのことが起こった時に、これからますます同じようなことが何回も何回も起こるだろう、それを起こる寸前でいかに食い止めることができるかできないかというのが日本の問題だろうというふうに思ったんです。

ところが、その予測は完全に間違っていて、以後何も起こってない。これは一体どういうことなんだろうということなんです。もちろん東南アジア諸国のインテリの間で日本に対して批判的な意見があることはよく存じておりますけれども、それにもかかわらず、私が当時予想したよりはるかにうまく日本とアジアの関係が行っているということも、また客観的な事実であります。

私はこのことを説明するのに、二つの仮説があると思うんです。一つは、依然としてうまく行っていないけれども、爆発寸前で、ただ爆発してないだけだということです。そうすると、そのうちに爆発したらえらいことになるぞということになるんですね。もう一つの仮説は、やっぱり東南アジア諸国および日本両者があの経験に学んで、以前よりは賢くなってるんじゃないかというものです。

どっちが正しいかということは何人かの人に議論をふっかけてんですが、東京大学の東洋文化研究所の猪口孝さんは、「まだ十年早しかたっていないのに、どっちかに決めるのは早いよ」と言われて、なるほどそういう見方もあるかと思ったんですけれども、そういうことをどういうふうに見える

のかということですね。

「非対称的」ということは全くそうでして、その非対称性がますますひどくなっていることも事実で、日本の外務省が『ODA白書』を毎年出すんですが、そこで日本が第一位援助国になっているLDC＝低開発国の数が必ず言われるわけですね。今三十ヶ国です。日本が第一位の援助国になっているということはどういうふうに言うかと言うと、やや品のない表現で言わせていただくと、「日本が丸抱えにしている国」ということですね。

その中のひとつに、例えばタイという国があるわけですが、タイは、例えばどうということになってるかと言うと、バンコクの空港で降りるんですが、空港のビルは日本の援助でつくったんですね。それから、空港から都心まで行くりっぱな高速道路が何年か前にできたんですが、これも日本の援助です。それから、バンコクの市内にメナム川という大きな川があって、ここにりっぱな橋が幾つか架かっているけれども、その過半数は日本の援助なんです。そうすると、プレスティー・プロジェクトという話が援助の専門家間でよく使われるんですが、要するに派手な日本のプレスティー・プロジェクトにもなり、低開発国自身の現政権のプレスティー・プロジェクトでもなるような派手なことばかりやってるかと言うとそうじゃなくて、例えば農村の各地域で小さな溜池を掘って、それを農民に自主管理させて、非常に狭い範囲の灌漑をやるわけですね。その池で魚を飼って、農民のタンパク源にする。そういう非常に地味なプロジェクトもやっている。

だけでも、今申しあげた例からおわかりになるように全く丸抱えで、恐らく「丸抱え」なんていう言葉を聞くと、LDC＝低開発国の方は非常に不愉快に思うに違いないけれども、客観的に見てそうなんです。だけど、それ以外の方法があるんだろうかということなんです。

どういふわけか知らないけれども、第二次大戦後、今のようになっってしまった。植民地が独立して、独立した直後は大変意気が上がったんですが、経済の開発がうまく行かないケースがかなり多い。そうすると、そこへ先進国がお金を「援助」あるいは「協力」という形で注ぎ込むという

ことが、制度としてできてしまったんですね。その中でやって行くより仕方がないじゃないかというのが私の非常に現実主義者としての判断で、そうすると、石田先生のご批判は非常によくわかるんですけども、他方においてそう言われても困るなというのが私のように現実コミットしたものの意見です。本当に悲しいということを非常につらい気持ちで発言させていただきます。以上です。

芳賀 その気持ちは皆さんによく伝わったと思います。今のたいへんセンシティブな問題もはつきり出てきたことは非常に意味があります。

では皆さん、なるべくフランクに。

エセンベル 私はウィシュワタンさんには賛成してらんですが、ちょっとコメントがあるんです。ひとつは、近代化ということ割合に国の内容の状況、その比較、それとまたその比較化に足りない部分で、それで本当に先生のおっしゃる通り文化論だけで言うのはもったいない、結果がおこせないぐらいの単純化することになっているんですけども、ですからかわりに近代化を見ると、その国の内容の状況だけじゃなく、本当に二十世紀になって、十九世紀ももちろんですけども、国際関係が大事に思うんですよ。

その時期によってほかの国々とのパワー・ポリティックスと言うんですか、例えばインドと日本とまたトルコの国際関係を比較してみると、全くある意味で日本も幕末時代には西洋の国々に圧迫されたというふうに言われるけれども、実はその国々の政策は日本を植民地にしようというのが第一のプライオリティじゃないですね。日本に影響しようとか、日本と交易しようとか、日本を巧みに使おうというふうに考えたかもしれないですね。イギリスとかフランス、アメリカはね。

しかし、例えばインドや中国などと比較すると、もっと活動的なプライオリティが日本に対してはないんですよ。日本に対して連合国がもっとヒューマニステックになったということじゃなくて、たぶん日本がそんなにお金持ちじゃない、あまりにも島国で、苦勞して植民地なんかにするにはもっ

たいないという気持ちもあつたんじゃないですか。インドと比較すると、インドは大変力があつたり、ものすごく経済的にもいろいろなことが可能にできるというふうな地域ですが、日本をこれと比較すると、なんか苦勞しなくてもいい、ちよつと貿易だけしてればいいという感じがしてゐるんです。

それとまた、日本は維新と日露戦争まではちよつと運がよかつた。それも国際的な状況ですよ。日本人の力だけということじゃなくて、運がよかつた。国際的な関係は、日本に対してはそんなに一生懸命圧迫しようとか侵略しようとか、そういう政策はあんまり見えないんですね。例えば日露戦争にしても、忘れられないことは、もちろんイギリスが賛成してゐるんですよ。一生懸命やれやれというふうにな。

ですから、その時期のロンドンの新聞記事なんかを読んだら、日露戦争では日本の役割は「Japan wrote freedom」というふうに解釈されてゐるんですよ。これはメインストリートのイギリスの新聞の解釈です。何の「freedom」か何の「wrote」か今から考えてみるとわからないんですけれども、しかしやっぱりそういうイギリスにもその考え方があつて、それも大事だと思うんです。これが一つです。

二番目は、例えば技術の問題。実は私がびつくりしたことは、インドは技術と科学が遅れているという考えは初めてここで聞いたんです。トルコのアカデミアの人々も国家の機関も、インドは優れてると、アジアの新興国の一つに今もう、なつていゝうふうに解釈してゐるんです。例えば二三年前にトルコのステイップライニング・エージェンシーがアジアの国々の技術と科学の進歩を比較して詳しく研究したんですね。インドはやっぱり第一位。ですから、インドは本当に進んでゐるんですよ。別に遅れてゐるということじゃない。別の問題があるかもしれないけど、科学技術では結構魅力的な進みがあるというふうなトルコのほうからは解釈してゐるんです。ですから、これはちよつとネガティブな解釈ではないかというふうには私に考へるんです。

芳賀 ありがとうございます。

今石田、ウィッシュワナタンという二人の政治学者の比較の見方に対して、さらに経済学者と歴史学者からそれを更に相対化しようという意見が出てきたわけで、ではお答えを先にいただけますか。

ウィッシュワナタン 飯田先生のことよくわかります。ですから、本当に先生もおっしゃつたように、耳の痛いことを私いつも言つて評判が悪いんです。日経新聞の方に、「ウィッシュワナタンさんはいつも日本の悪口を言うから話してください」ということも言われたことがあるし（笑）。だから、別に日本を責めるということではなくて、私のペーパーにも言つたように、アジア諸国のほうも「give me, we will forgive」と言つた時、こちらも「give」と言つてゐるということも出てくるし、そして日本もいろいろな問題があるところもあれば、小さいプロジェクトにも援助してゐるということもご指摘があつたから、それも認めます。

しかし、私のペーパーの最後に出てきてゐるように、物だけではないということね。そのところを私は主張したいんですけども、物を与える時、例えば賠償問題が石田先生のほうから出たように、本当に賠償交渉によつて非常に相互理解が増えることができたのに、そのやり方によつて全部だめになつた。インドのタミル語にもあるけれども、「いろいろないいことをして汚い水を手を入れた」というような、効果が出ないようなことをやつてしまふと。ですから、お互いに協力してゐるということよりも、あなた方はできないから私たちが与えるという立場でやつてゐるということは、もちろんそれは恐縮ですが、そういうことはいつも出てきてしまふわけですね。ですから、そのことをもう少し反省したらいいではないかということ。

これは日本だけの問題じゃなくて、ここは日本が問題になつてますけれども、先進国と発展途上国との問題だし、ですからそれは日本も先進国の一員として……。最近の経済学者の先生も存じのように、今特にアメリカとの摩擦、そしてヨーロッパ諸国との摩擦が出てきてから、やっぱり日本がもっともつと先進諸国に向いてゐるということも確かですね。で

すから、そのこともアジア諸国、発展途上国のほうから見ると、これからどうなるかということ。だから、競争相手はすぐ強くなってるではないかというような感じがします。

それからエセンベルさんのことですけれども、おっしゃる通りです。江戸時代のことか。私も一回ある日本人の先生がいろいろ歴史のことを言っていて、日本が一生懸命にやって独立を守ったと言った時、私は「やっぱり運がよかったんではないか」と言ってますごく叱られたんですけれども。ですから、私たちが無力なので日本に嫉妬してると言うか、そういうふうには受け取られるんですけども、本当に日本はいろいろ運がよかったです。

最後のことですけれども、私自身がインドが遅れるとは言ってません。科学的にも技術的にも。しかし、そのように言われるということですね。そして、マライニ先生のこのような文化を持つてから科学技術は受け入れられないでしょうということ、私は賛成はしていません。しかし、そういうことが言われています。だから、日本との技術協力の面でも、日本人も時々認めなければならぬ。しかし、いろいろ不足しているところもあるし、またマネジメントと言うか、運営がよくない。技術ができては運営がよくない。それは飯田先生のほうがもっともってご存じだと思いますが・・・。だから、たくさん問題があることはあります。効果がそんなに出不いというところは、インドに限って言えば、インドがまだ反省しなければならぬことがたくさんあることも認めます。以上です。

芳賀 石田先生。あんまり古い十何年前の議論をまた・・・。

石田 いや、それはやるつもりはありません。私はだからODAのことも多少しらべてみましたけれども、そのことを議論しようとは思わない。異なった文化をどう理解するかということだけを当面問題にしたい。

一九八〇年に外国の日本人学校で教えてた経験を持つ先生たちの会合がありました、そこで「マイナスの国際化」ということを言い出したんです。それはどういふことかと言うと、外国の日本人学校で学んでいる子どものほうが日本にいる子どもよりもその国に対する偏見が強いということなんです。

例えばインドネシアの日本人学校の子どもは、インドネシアの人は怠け者で嘘つきでというような偏見を日本にいる子供より強く持っている場合がある。しかも自分はそこへ行って暮らしたのだと言うと、いかにも本当みにたいに聞こえるわけです。そういう意味で大変心配だというのが先生たちの心配です。

それはどうしてそういうことになるかと言うと、親が自分のところで働いているお手伝いさんにあんまりお金も十分払わないで、たまに砂糖がちよつと減ったとか、そういうことで嘘をつくとか働かないとか言うので、人間として対等な立場で理解しようとしないうところに問題がある。それが非対称的ということです。

だけど、悪いほうばかり言うといけないから、いいほうも一つ例を挙げます。私がタンザニアで教えていた時に、あそこに非常に成功した日本の工場があるのです。その日本人工場長に会いました。そして、初めは雨が降ると労働者がだれも出てこなかった。そこで、聞いてみると、雨が降ったら外へ行かないという我々の習慣なんだという。それではと言うので、傘をみんなにやったわけです。会社のマークのついた。そして喜んでその傘をさしてみんな出てくるようになったというわけです。つまり、怠け者だと決める前に、この国の文化はどうで、習慣はどうでということをやんと理解すれば、それなりに経済発展もできるのだという例です。ちなみにその日本人工場長は工場の人たちを「ウインドウグ」と呼んでいる。「ウインドウグ」というのはもともと「兄弟」という意味で、それを「同志」と言うよびかけに使っている。社会主義国ですから。そういう形で相手を理解しようという努力すればやっていけるといふ希望があるということをつけ加えておきます。

それから、エセンベルさんの言われたのは、アヘン戦争の経験とか、そういうことから日本は学んだということであって、距離、地勢学的に非常に得をしているという点でした。それで思い出したのだけれど、アジアを旅行していると、インドのように日本から遠く離れていくほど日本に対する恐

怖よりも期待が大きくなることに気づく。そういう話をインドネシアのクンチャラニングラットさんに言ったら、それは距離の問題だけではないのだと。やっぱり日本に軍事占領されていたかどうかということが重要なのだということと言われたのを思い出しました。

ペフ 明治の時に既に日本は、アジアの一員であることから脱して、そしてヨーロッパの一員になろうという決意をしたわけですが、それが「富国強兵・文明開化」というようなスローガンをもって進められていって、そして現在それが裏目に出てこういう結果になったというふうに私は思うんです。

もうひとつは、日本の近代化という言葉自身がもう破産してしまっていて、使うべきものではないと思うんですが、しかし一般市井ではそういう言葉がいまだに使われていますし、使われなくても日本の「高度経済成長」という言葉でそれをすり替えているということがあると思うんですね。日本はどうして近代化したかと聞かないで、どうして日本が高度経済成長に成功したかということで結局同じことを聞いているんですね。ですから、それは日本がどんなにいい国であるかということをおうとしていているということもつながると思います。

その説明をするのにいろいろな要因が挙げられて、ウィッシュワナタンさんもその幾つかを挙げられました。ところがインドには同じような要因があるのに近代化していないということをおっしゃったわけです。それは非常に大事なことで、今までの説明変数というのが本当の説明変数でないということになる。昔は儒教が東洋の近代化を妨げてきた、だから、中国も韓国も台湾もだめなんだと。ところが、そういう国々が近代発展をし出しますと、いやそれは儒教のためだと同じ要因をもって説明しようとする。そういう非常に安易な説明の仕方をしていきます。

では、どうしてそういう要因を挙げているのかという問題があると思います。それは私なりの考えでは、まず近代化ということはいいいことだというそういう前提がある。ですから、近代化を可能にした要因もいいい要因で

ある。日本が神道を持っていて、そして集団志向がある、そういうふうな要因で近代化を説明する。だから、日本はそういう要因を持っていることはいいいことだと。これは日本の文化を美化して正当化していくひとつの手段にもなっていくわけです。そういう理由でそういうことが今でも本当でなくても言われているんじゃないかと思えます。そういうふうな説明の仕方は本当じゃなくてもいいんです。みんなが信じていけばいいんで、それが日本人の優越感というものを助長している。それがひいては飯田先生がおっしゃったように日本のODAで三十何ヶ国も丸抱えしているんだというふうな、非常に無礼なことをいう要因にもなっているんじゃないかと思えます。

クラハト ウィッシュワナタン先生にはとてもいい印象を受けました。本当にありがとうございます。

先生は、ご自分の生活を通して才三世界の現実を経験なさっています。しかし、特に気になるのはペーパーの最初のほうです。そこには少し議論の余地もあるんです。

「日本が非西洋国としてだけでなくアジアの一国としても近代化を通して自分の独立と進歩を図った国として私は誇りを感じますし、日本のことを考えるとき、単なる『他者』論に持ち込むのは避けるべきだと思いますし、地理的にも文化的にも同じ圏にある国として検討したいと思えます。アジアの諸国はそれぞれ特色を持っていますし、日本にもそれがあります。しかし日本が近代化に成功した・・・」

もういろいろ近代化については話がありましたんですが、それは難しい言葉です。そして言葉の魔術に属する言葉です。ウィッシュワナタンさんは「日本が近代化に成功した・・・」とおっしゃられました。それは多分に理想化、もしくは美化された概念ではないでしょうか。私の印象では、近代のプログラムはまだ表現されていないので、日本に限らず、ある国が近代化に成功したと断言できるのかどうか少し疑問があります。

その次は、「非西洋国」という話ですね。私は西洋人として少しアウト

サイダーの気持ちがあるんですが、先生は「西洋人」という言葉をお使いになりましたね。それは少し厳しい句調があるという気がします。新しい人種主義が起こるんじゃないですか（笑）。西洋人はこれから危ないかもしれないですね。

それから、「地理的にも文化的にも同じ圏の国」。エゼンベルさんは、イマジナティブ・ジオグラフィという言葉を使いました。そういう意味では同じ圏であるかもしれないですね。「アジア」はヨーロッパ人がつくった概念でしょう。元来インドにいる知識人は「アジア」という概念を使ってらっしゃるでしょうか。そして、「文化的にも同じ圏です」とおっしゃいました。でも、日本の歴史的存在の条件を見れば、日本はいろんな圏に属したんじゃないですか。あなたの圏に属する国とするには、多少問題がありま

すね。

今の環境の危機の時代、全世界を破壊しようとしている時代には、そういういろんな圏があるということとはよくないと思いますね。世界はひとつの圏であるという意識をつくればいいんじゃないですか。我々は学者としてそれをよく理解しているはずだと思っんですが……。

世界は本当はひとつの圏になっている。そして、今の危機の時代に、また世界をいろんな圏に区別したらちよつと危ないんじゃないですか。

芳賀 それでは、お答えの前に吉田さん。

吉田 感想だけ少し簡単に申しあげさせていただきますと思います。

第一はこの「近代化」という問題でありますけれども、それはほとんど理論のレベルで議論が尽くされているわけですが、今日飯田さんが体験的なところをおっしゃったので、体験的な問題から入ります。

例えば学問そのものの近代的方法は、実は大きな問題を持っているのではないか。私はパキスタンでガンダラの発掘の経験がありますが、この発掘は、ある意味では文化侵略であり、同時に発掘のためにたくさんの人を集めて、日給を払う。これは村の経済を完全に動揺させました。日本のみならず、イタリー、あるいはフランス、それからイギリスですが、それ

らの国が各地でやっていることは、実は経済的な動揺を与えている。これは現実的な体験です。もうひとつ大きな問題は、発掘品が商品になることを我々は教えてしまった。従って、今日はガンダラはもうほとんどヘッドは出てきません。もうそれは全部盗掘されてどこかに売られている。これはある意味では歴史破壊になっている。

ということは一体どういうことなのか。近代的な学問は、そうした破壊も必ず伴っていく。つまり、文科系で考古学なんて、歴史的経済的にはあまり影響を与えないと思われるようなものが、実はそういう影響を与えているということ。これをひとつ申しあげておきたい。

それから第二は工業化。日本は確かにウィッシュワナタンさんがおっしゃったようにラッキーでした。それは十九世紀の工業だったからです。私は一九五〇年代から六〇年代にかけて、日本やアメリカのピース・コーなどが皆入っていた時代、その時代は農林業に対するいろいろなアドバイス、援助という状況の時代でした。その時代を、私は幾つか見聞し、その中にもおりましたが、かなり平和でしかもアクティブな形で進んでいた。ところが、ODAが組織的に活動していくと、組織的工業化が行われ、その工業化のスピードの速さが、日本の場合は長い時間をかけて社会の変化が起こってきたためにまだそれがミニマムで済んでいたところが、こんどはそれが逆にマキシマムに表現されていく。

タイの農村の変化は恐るべきものであり、かつては自給経済であったのが、完全に商品経済に入り込んでしまう。この間わずか十年、十五年です。それは日本の一世紀以上のステップとはまるきり違う。こういうところに現在のODAそのものが実は負わねばならない責任があるんじゃないか。これは現実にはODAを担当された飯田さんあたりはどういうご見解かわかりませんが、私は非常に大きな問題を今日の先進国は残したのではないかと思えます。

その二点をちよつと申しあげておきます。

芳賀 どうもありがとうございます。

だんだん話が、今日の発表者ウイシュワナタン先生とコメントターの石田さんだけじゃなくて、この席の人相互の間の議論にもなってきたわけです。ここでウイシュワナタンさんからまず。それから石田先生から。今までベフさん、クラハトさん、それから今の吉田さんと、三者からいろいろ注文、ご意見がありました。

ウイシュワナタン ドイツのクラハトさん、いいご指摘をしてくださったと思います。実は、私の発想は日本はアジアではないというようなことですから、そこから出てくる問題です。一番最後のクラハトさんの「世界のひとつの圈になっているから」ということは、私はそうなってほしいと思うんですけども、今私のそこに書いたのは、やっぱりアジアと日本ということがありまして、それから日本はアジアに属していないようなことが言われているんじゃないですかということで、少し強く言ったかもしれないんですけども、私は日本はアジアの一国だと思いうことですね。

それから、いろんな文化が入ってアジアの文化だけではないとおっしゃることも、それは日本だけではなくて、インドもひとつ何かインドの文化が自分で生まれたとは思ってません。そこもいろんな国の影響があって、昔からギリシャの文化が入って、インドは今もいろいろ受け入れているということとは認めます。

それから「近代」という概念ですけれども、日本が近代化に成功したと思われるかと言うと、そこも非常に単純化してしまっただけでも、私は近代化の定義によって成功したか、しなかったかということになると思いますが。それも大きな議論になるので避けますけれども、クラハトさんがおっしゃるように、必ずしも全部成功したとは思いませんし、それは説明が足りなかったということ。

だから、私のポイントは、日本はアジアの国だと。だから、日本はアジアから離れて地理的な条件を否定することはできないということ。それから、アジアからも日本はいろいろ学んできたということ。また、日本とアジアの関係を考える時、ほかの西洋の諸国のことも考える時、お互いに私

たちはいろいろ学んでいるし、いろいろ与えているという前提に立って話さないで、やっぱりお互いに誤解が出てくるのではないかと思えます。それだけを私は指摘しなかったんですね。

また、時間がなからあまり説明できないけれども、吉田先生のおっしゃることはもともとだと思うし、私は、日露戦争の時とか第二次大戦前のことと先生がおっしゃったから、それに賛成した、同感したということ。それからまた、石田先生のご指摘もあつたように、アヘン戦争から学んだと。例えばインドの第一独立戦争と言われるセポイ革命もあつたし、またアヘン戦争もあつたし、日本は、そういういろいろのことで前例がありまして、西洋と言ったら皆さん気になるかもしれないけれども、やっぱり帝国主義の性格がわかるようになったということですね。

芳賀 しかし、わかる能力もあつたんです、日本人がね。
ウイシュワナタン それはだれも否定していません。だから、全然日本がやつたことに意味がないとは言っていない。それは誤解しないでください。

私は、もう一歩進んで、もつとお互いの理解を増やすためにどうすればいいかと。そして、私たくさん説明しなかったかもしれないけれども、このようにいろいろの摩擦がある時、一方的に日本だけを責めることはできないということをいつも認めています。だから、ODAとかそういういろいろなこと、受け入れる側のほうも問題がある。

例えばプロジェクトをいろいろおっしゃったんですが、インドネシアの場合も、賠償の時につくつたのは大きなファイスタンフディですね。それで経済的インフレがでるかどうかということは、インドネシア政府も考えなければならなかった。それは認めます。だから、インドの場合もそうだし、ほかの諸国の場合もそうですね。

そして、近代化、工業化によっていろいろ環境破壊になるということも認めます。だから、お互いにそれをどうすればいいかということを考えなければならぬし、時々第三諸国の場合はその認識がないから、それが一

回破裏されてからどうしようかということ、また日本に技術援助をしてもらおうという傾向もあるわけです。

ですから、両方とももう一回反省しなければならぬということ、お互いの協力が必要だということ、どんなに経済的に遅れてる国でも、ほかの先進国との関係によってお互いに繁栄しているということを前提に置かなければならないということだけです。

芳賀 こうやって考えてみると、しかしこれだけ議論がいろいろ出てくるという以上は、「近代化」という言葉は非常に大事な概念です。やっぱりね。「近代化」をひとつのイデオロギーとして考えることは具合悪いけれども、しかし「近代化」そのものをめぐってこれだけ議論がやりとりされるということは、つまり「近代化」という概念は非常に有効であるということですね。それは、クラハトさんのように、リベルテ、エガリテ、フハテルニテがどこに実現されているかというようなことを言えば、それはフランスだってまだ、アメリカだってまだ、イギリス、日本だってどこだってそれを実現した国はまだないだけであって……。

では、石田さん。

石田 ただ一点、文化圏という問題についてコメントをしたいと思います。

私は近代を専門にやってるものですから、近代についていえば、ある文化現象についてその起源が西欧か非西欧か、西欧かアジアかなどという分け方はできないというふうに思います。と言うのは、例えば平田篤胤は非常に日本的だと言うけれども、彼の神道論はやはりキリスト教文化に対するひとつの反応という面を持ってるし、アリア・サマーシというのは古いヒンドゥの復活だというふうに見えるけれども、やっぱりキリスト教文化に対する反応だともいえる。つまりこの両方の場合、ともに伝統について一神教的な解釈をはじめたのはキリスト教の影響によるからです。もつとあとになれば、例えば天賦人權説という考え方はヨーロッパの自然権の考え方と儒教的な規範意識とが結びあってきてるし、それと対抗した社会進化論ではヨーロッパから入ってきた要素とアニミズム的な成長信仰と

がくっついていっているということになって、近代を考える場合には、何の文化圏だというよりは、どの文化圏のどの要素がその国のどの文化的要素と結びついてどういう役割を果たしたかということのほうが私は重要だと思うのです。

そういう意味で、日本の文化はこうだと言うのは特に近代においては非常に危険で、日本の文化の中にもいろいろな要素があって、そのいろいろな要素というのはどれが本当の日本の固有かというのではなくて、もう既に多様な要素が外国から入ってきてそれがお互いに対抗しているということなので、そういう意味でもやはりひとつのネーション・ステイトの中の文化の多様性ということを考えなければいけない。

それと関連して、もうひとつの問題は、やっぱり日本の文化の中におけるマイノリティ・カルチャーというものに対する敏感性がなかったということが、私は他文化への敏感性がなかったことと関係していると思います。例えばアイヌとかそのほかの少数民族を無視してたということが、朝鮮統治の際そこにおける文化的伝統を無視したという問題になり、あるいはいわゆる「大東亜共栄圏」において文化的多様性を尊重しなかったという問題になったという意味でも、私は、ひとつの文化あるいは文化圏と考えることは近代においては特に危険だというふうに思います。

芳賀 そうですね。だから、ひとつの文化、ひとつの国の諸文化というのは結局タマネギ、オニオンであって、皮をむいていけばどこまでもむいていける。ウィッシュワナタンさんはインドにはギリシャも入ったと言うけれども、そのギリシャだってまたあちこちから集めてできてる。そこから始まったというところは、まあメソポタミアとか、あのへんに行かなきゃないかもしれません。ですから、お互いどこもそう。フランスもイギリスもドイツも日本も韓国も中国も。中国だって外国からいろんなものが入って、そして中国文明ができあがった。それを入れなくなったから中国は滅び出した、傾き始めたというのがあの「河殤」というテレビドラマでしたが……。

じゃあ、伊東さん。それから最後に飯田さん。

伊東 今まで共通の前提として「近代化」というのはいいものだ。日本はそれをみごとにやり遂げたんだが、まだほかのアジアの国はそれをやり遂げていない。だから、そこにはどういふ欠陥があるんだろうとか問題があるんだろうとかいうような話になっているように思うんですが、しかし「近代化」というのは果たして一方的にいいものかどうか。このことを根本的に疑ってみる時代に突入しているんじゃないだろうか。

つまり、日本で科学技術が進んで、ヨーロッパでもアメリカでもそうですけれども、そういうものが今非常に大きな環境破壊をもたらして、地球そのものが減ってしまうかもしれないようなエコロジカルな問題も環境破壊の問題もでてきている。そういう時代になった時、「近代化」の行くはてが果たしていいかどうかということ自体が疑われなきゃならない。ですから、その面でもって近代化に対してマイナスの符号を与えられたほかの文化というのは再評価も考えてみなければならぬ。

もしも日本のやり方がいいとして、これのような文明のあり方が日本だけでなく十ぐらい他にできたら、これは完全に地球は滅びますよ。今のような日本のやり方をほかの国でもどんどんやっていったら、これは地球はめちゃくちゃになることは確実なんです。ですから、決して今の日本のやることがいいことばかりではない。模範ともいえない。日本をはじめとして人類がもう一度文明の形というものを、根本的に近代化論から離れて考え直さなければならぬ転換期に立っているということを、ちょっと申しあげておきたいと思います。

飯田 吉田先生からご指摘のあった問題にお答えしなきゃいけないとしたら、いま伊東さんの話もそういうことに関係するんですが、確かに近代化にはいろいろ問題があり、農村が市場経済になることで果たしてよくなるか、幸せになるかということは問題があり、しかもそれが非常に急スピードで進むことに問題があることは事実なんですが、しかし、同時に私は、それはやっぱり日本のように非常に物質文明の恩恵に浴し、やや飽きた人の言うことではないだろうか。

それからもうひとつは、低開発国、まだ近代化をやってない国で言いますと、近代化の悪い面まで考えが及ぶようなインテリの議論ではないだろうかと思うんです。私がインドネシアでつくづく思ったことなんですけれども、ご承知のようにジャワ島というのは地球で最も恵まれたところで、農村だってそんなに貧しくないわけですね。飢餓はないわけです。それにもかかわらずジャカルタへどんどん人と人が集まって、それが石田先生の話に出た女中なんかになるわけですよ。私なんかが見てると、ジャカルタのスラムなんかへ出ていくよりは、農村で簡素だけでも、決して豊かではないけれども、それなりにきちんとした生活をしてたほうがはるかにいいと思うんです。それはしかし我々が思うことであって、やっぱり物質文明のものがすごいきらびやかなことが、普通の人に与える誘惑というのはものすごく強いということを否定したら、僕は非常に議論が非現実的になってくるという考え方をしています。

例えばソ連、東欧で今起こっていることも、それが非常に大きな要因としてあるという強い印象を受けてるんですね。要するにアメリカン・ウェイ・オブ・ライフと言われるような今の自由主義圏の言わば半分頹廢したような物質文明は、それをまだやったことがない人にとってはものすごく強い魅力であって、そのことが大きく社会を動かしているということをやっぱり無視できない。その問題があると思います。

芳賀 数年前に京都で環境破壊問題について国際会議があつて、そこで我々のこの国際日本文化研究センターの産みの親の一人である桑原武夫先生が、やはり工業化というのは環境破壊というふうな非常に人類に対する悪をもたらす、だからセーブせよというふうな講演をしたら、その出席者の中から猛烈な反発が出たことを新聞でも読んだことがあります。

だから、確かに空が真っ黒になるぐらい煙突を立ててみたいというのが、例えば明治の初めの人間たちの考えでした。今から考えると、なんか江戸時代の慎ましい、そして風雅で謙虚な日本人の心豊かな生活、あれがよっぽどよかつたろうと思うのに、あの十九世紀の後半日本はやっぱり空を真っ

黒にせざるを得なかったんです。それでなお残っていたところをラフカディオ・ハーンは見ていたわけですが、そこはだから非常に問題だろうと思います。

吉田 私の感想は、飯田さんは日本の中でおっしゃったんですが、五〇年代の日本は、私はまだ貧しかったと思います。私もタイへ行ったほうが豊かな暮らしができました。パンコクのほうがはるかに京都より豊かな暮らしが暮らしてありました。そういう豊かさというものと、それからいわゆる工業社会、きらびやかな豊かさとは一体どう違うのか。工業社会のきらびやかさに向かっていくのは、これはもう人間のひとつの共通の願望としてあきらめてしまうのか。そこに私は、日本の近代化の場合と、二十世紀、特に四五年以後の近代化とは、何か質的な別のものを考えねばならなかったんじゃないか。これは本当に単なる体験的感想ですけれども、それは私、いまだにその記憶と言うか、それが残っているわけです。

芳賀 だから、日本が自らこれだけ物質的繁栄を享受しておりながら、ほかのアジア諸国はこんなふうになるなというふうに言うのは……。

吉田 当時は確かにパンコクのほうが豊かでした。
ペフ 近代化のことが出まして、近代化はいいかどうかということなんです。これは吉田先生もおっしゃいましたように、近代化論というのは一九六〇年代に出てきたものですが、その近代化論ということ、それから現在起こっている工業化、工業化に伴う生活基準の向上、あるいは低下かもしれないですけど、そういうことは別の問題なんです。それを区別する必要があると思います。

私が言っているのは、理論的な意味での「近代化」が日本では破産しているんだと。どうしてかと言いますと、近代化論というのは結局はマックス・ウェーバーの理論から出たものでして、マックス・ウェーバーの議論というのはヨーロッパ中心主義の議論なんです。ヨーロッパがまず近代化して、そしてそれにヨーロッパ以外の国々が追隨していく。どれだけよくヨーロッパを先生にして、そのモデルについていけるかというのが近代化

論なんです。そんなばかばかしい理論というのはもうやめといたほうがいいというのが、ごく簡単に言いまして一九六〇年代に近代化論が死んでしまった理由なんです。

芳賀 ただし、一九五〇年代までの日本における日本史研究のことを考えてみると、近代化論という一種の比較史のフレイム・ワークを持ち込んだことは、非常に狭かった島国の日本史を広げる、開けて見せるという、非常にプラスの意味があったと思います。近代化論というものの考え方がね。だから、それは近代化礼讃ということとはまた違ってね。

ペフ 五〇年代、六〇年代にはそういうひとつの役割を果たしていた。ですけれども、それをもっと理論的に探ってみると、それはヨーロッパ中心主義から出てきたものという、そういう反省が出てくる。

芳賀 それが出てきたことは確かです。

それじゃあ、ブロードベントさん。

ブロードベント 私もコメントを加えたいんです。

日本の世界経済システムへの哲学と、日本の海外に投資している大企業の根本的哲学と、日本政府の協力と世界のシステムの矛盾が、非常に深く今の状態にからんできてきていると思えますけど、これからそれは大きく変わっていくと思います。

と言うのは、これに取り上げられているいろんな問題点と長所も含めて、特に問題点のほうは、日本はもともと余裕がないという前提に立って、まざいギリス帝国主義にいつやられるかという恐怖感に応じて自分の帝国主義を起こした。生き残る道としてはそれしかないと思っただけです。そして、戦後になって帝国主義制度は大分なくなったけど、アメリカを見たら、アメリカが作った世界体制システムは同じようにひとつの新帝国主義的に解釈してきたんじゃないかと思えます。そして、それに応じて、ちょっとおかしい表現になると思いますが、日本での経済的な最高指導者は、非常に皮肉なことですけども潜在的なマルクス主義的な世界システム解釈をいまだに持っているんじゃないかと思えます。

要するに、世界体制システムでの根本的な国対国の対立は経済的な競争に基づいていること、そしてその経済的な競争で勝てないと結局破綻してしまうという深い恐怖感を持っていると思いますし、その自転車経済が倒れないように一生懸命続けていかないと倒れるんじゃないかと思ってる。

そういう理論に立っていけば、実はこのあいだ、日本政府のひとつの省庁の最高指導者と夕食を食べながらこういう説を出したんですけれども、彼は「なるほど、私も東大でマルクス経済主義の教育を受けてきた者です」と認めてくれた。そうすると、そういう理論に立って、まず外国の文化などまで理解して、それに応じてその国がそれなりに育つ余裕がないことを考えるようになることも当然だし、その上にさらに皮肉的な結果としては、国内での資本集めは大企業のほうにどんどんと集まってくるけど、国民まではあんまり回ってこない。なぜか。外国投資が日本の安全のために必要だと思ってるからです。

公共施設への十分な投資がなければ、公園もできないし、文化財、日本の文化までい害を与えるようになります。文化保全とか、十分茶道を練習するひまを与えられなくなる。そういう結果になると思います。

芳賀 ありがとうございます。

では、白幡さん。

白幡 前のセッションを含めて、テーマの設定についていろいろ議論が出しました。我々はこの国際研究会の実行委員長とセッションのあり方とテーマをいろいろ考えたわけですね。それで、今日はアジア、アフリカと日本研究の課題を持ってきたわけですが、テーマの設定が悪いということもたくさん言われました。そもそも本日のセッションでは「近代化」という場合に、理論的なタームとしてあんまり使わないという前提をもって準備してたんです。このセッションで考えましたのは、やはりアジア・アフリカにおける日本への関心をベースとした日本研究ということにこだわったわけです。とにかく、日本に対するあるがままの関心を大事にしようという立場です。

日本研究の中では、もはやあるディシプリン、学問の枠組みから出て外から日本を見ているというようなことを言われましたが、「近代化」という強い関心をもってアジアの諸国から日本に留学してきている人がいる。現実的に日本の近代化を研究テーマにして、日本に來ている人がいるわけですね。その人々は日本研究者であると我々は考えているわけで、そんなテーマはだめだ、近代化なんて学ぶべきものはない、というのは不遜ではないかと思えます。この人たちの研究テーマをどう生かすか、それをどういうふうに発展させて、どういうふう到我々が批判したり、あるいは援助していくかという、そういう観点があると思うんです。

ですから、「近代化」という用語についての問題点は、日本研究という立場に帰って、あるいはアジア、アフリカ、あるいはそれ以外の国でもそうだと思いますが、研究テーマの設定という意味で考えましたら、必ずしも死滅したわけではなくて、どんな切り込み方があるか、そこが問題だと思っんです。ペフさんの日本の近代化という言葉、概念が破産している、といったご発言には、いささか反発と言いますか、問題点を感じたわけで、その点について発言させていただきました。

芳賀 「近代化」という問題の立て方でも、まだまだ学問的チャレンジ性を持っているのではないか、有効性もまだあるんじゃないかと。だって今日のお二人だって、やっぱりそういう言葉から始まって議論をしてらっしゃるんだから、というふうに言えますね。

じゃあ最後に、ウィッシュワナタンさん、石田先生、一言ずつ。

石田 「近代化」ということにつきましては言いたいことが山ほどあるのですね。私がいいたいのは、さっきの伊東先生から出された問題と飯田先生が出した問題、これは非常に重要な問題なんです。価値観と結びついた文化の問題、文化というのをかりに概念化の方法、あるいは経験の意味づける枠組みというふうに考えますと、南北関係で北の価値観がだんだん南へ影響する。これは強いほうがだんだん影響するのは当然なので、それがまた

周辺の中の中央から周辺に及んでいる。つまり、インドネシアならインドネシアのメトロポリタンの地域から周辺に及んでいるということも、これは否定できない。ただ、それだからと言って、それはもうしようがないと考えるかどうか。

例えばODAの問題にしても、ダムでもって水没してしまう村の人たちが猛烈反対しているわけで、それをまた理解しようとする人たちが北側の中にも出てきたということで、せめてそういうところでネットワークをつくって、周辺からの声を中央に向けていく。これは、面倒なドミノを逆返しするようなことで、どこまでできるかわからないけれども、しかしそれをやるよりほかしかたがないのではないか。国内のマイノリティから中央にむけて声を出していくのと、それから国際的に第三世界からやるのと、それから第三世界の中のまた周辺からその第三世界の中央に向けてやるのと、それをなんとか協力をしてネットワークをつくっていくよりほかしかたがないのではないかとというのが私の考えです。

ウィシュワナタン 皆さんいろいろご意見出してくださって、本当にありがとうございます。私はこのペーパーを書く時いろいろ迷っていたと先も申しあげましたが、いろんな提案もいただきまして、私も大変勉強になったと思います。

石田先生もおっしゃったように、南北問題と言っても、先ほどブロードベント先生のほうからもご指摘があったように二国間の問題だけではなくて、国の中の南北の問題ということもあるし、それは私はインド人としても感じているわけです。ですから、何か日本のことを言うと、インドの中にある問題を無視して、あるいはインドの中に問題がないから日本のことを言っているとか、そのように受け取られたら私も困るんです。

先生が非常にきれいにおっしゃったように、国内のあるマイノリティのことと、そしてまたほかの国でも同じ考えを持っていて、闘おうとしているほうのネットワークをつくらなければならないということもおっしゃった。そして先ほど飯田先生が日本の経済発展のことをおっしゃったけれど

も、もちろん第三諸国から見ると、私個人から見ても、理論は別にして一番近代化で何を望んでいるかと言うと、国民がみんなよりよく食べて、よりよく着て、そして貧しさをどのようにしてなくしたらいいかということですね。もちろん貧しさには精神的貧しさとかも言われるかもしれないけれども、そういう問題に私たちは今直面しているから、それをどのようにして解決していかうかという問題もあるし、それにはひとつの方法だけではないと。

ですから先進国のほうから、それらの国々が歩んできた道のいろいろの矛盾からも学ばなければならぬ。同じ道を歩んで同じ失敗をしてまた学ぶということよりも、その中からいろいろ学んでいかなければならない。そのことも私はよく理解しているつもりですが、それは非常に複雑な問題で、皆さんのご意見も参考にしてこれから研究を進めなければならぬと思っております。どうもありがとうございました。

芳賀 非常に大事な問題がこの今日の最後のセッションに出てきましたので、皆様から非常にセンシティブな問題でありながらあえていろいろご発言いただきまして、大変充実した会議であったと思います。どうもありがとうございました。